

# 桐の葉も踏みわけ難くなりけり

— 素材史小論 —

山 崎 桂 子

我宿は道もなきまで荒れにけり

つれなき人待つとせしまに

を、本文としては、『和漢朗詠集』(秋(落葉))の白楽天の詩句、

秋庭不<sup>カニシテ</sup>掃<sup>ハ</sup>携<sup>ハ</sup>藤<sup>ハ</sup>杖<sup>ニ</sup> 閑踏<sup>ハ</sup>梧<sup>ハ</sup>桐<sup>ハ</sup>黄<sup>ハ</sup>葉<sup>ニ</sup>行<sup>ク</sup>

を認めるのが妥当と思われる。

ところで、式子内親王のこの歌の素材である「桐の葉」が、右の白楽天の詩句「梧桐黄葉」に拠っていることは確かなのだが、和歌の世界では実に珍しい素材の一つであつたらしい。すなわち、「桐の葉」という言葉は、万葉集以来千載集までの和歌に用例を捜すことが出来ず、勅撰集に於ては、新古今集の式子内親王のこの歌が最初の用例となつている。従つて、和歌の素材としては極めて稀な、と言ふより特異な素材であつたはずである。しかし、このことに言及したものはなく、管見の限りでは、わずかに、有斐閣新書『新古今和歌集入門』<sup>(3)</sup>のみである。同書では、佐藤恒雄氏が、この歌の解説として、「『桐の葉』の斬新さ」にふれておられる。

本稿は、式子内親王の「桐の葉も踏みわけ難くなりけり」の歌を契機として、「桐の葉」或は「桐」という素材が、和歌史の中でどのように認識され、扱われて来たのかという問題を、和歌や散文・漢詩文に用例を求めて考察しようとするものである。

「式子内親王は新古今歌壇の一惑星である」とは、石田吉貞氏の言葉であるが、彼女の残した珠玉の歌の数々は、今日尚、強い引力で我々を魅了してやまない。本稿の題目に掲げた、

桐の葉も踏みわけ難くなりけり

必ず人を待つとなけれど

の歌は、新古今和歌集秋下<sup>31</sup>に入集し、同じく「山深み春とも知らぬ松の戸にたえくかゝる雪の玉水」(新古今3)の歌や、「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする」(同<sup>103</sup>)の歌などと共に、式子内親王の秀歌として愛唱されている。一首の意は、「私の庭は桐の落ち葉がつもつて、踏みわけ難くなつてしまいました。必ずしも人の訪れを待っているというわけではないのですけれど」と、静かな晩秋のたたずまいの中に佳人の溜息がもれてくるような風情の歌である。

この歌は、『正治二年院初度百首』のうちの秋第十九首目の詠で、家集である『式子内親王集』に収められ、後には『自讃歌』にも採られている。爾来、この歌に関する古注・新注が多く存在し、本歌や本文などを指摘しているが、本歌としては、古今集恋五<sup>70</sup>借正遍昭の歌、

まず、和歌に於ける用例の状況であるが、万葉集と廿一代集・新葉集について調べてみると次のようになってゐる。(万葉集と八代集については、それぞれ総索引に拠って調査した。他は『新編国歌大観』の索引に拠るものである。遺漏もあろうかと思うが、大よその傾向は把握できるものと考ええる。)

(表 I)

撰集名	歌数	部立・番号・作者
万葉	0	
古今	0	
...	...	
千載	0	
新古今	1	(秋534式子内親王)
新勅撰	1	(冬393家隆)
続後撰	0	
...	...	
新後撰	0	
玉葉	2	(秋480院御製) (秋725永福門院)

続千載	1	(秋367伏見院)
続後拾	1	(秋401常盤井入道前太政大臣)
風雅	7	(秋450入道二品親王法守) (秋645昭訓門院権大納言) (秋646太上天皇) (秋710西園寺前内大臣女) (秋711永福門院) (雑1549平英時) (雑1592從二位為子)
新千載	0	
新拾遺	2	(恋1105後九条前内大臣) (雑1881大納言経信)
続後拾	0	
新統古	1	(賀789按察使公保)
新葉	3	(秋278読人不知) (秋279後村上院) (恋995中務卿宗良親王)

(表 I) には表われていないが、万葉集に、歌の中ではなく、巻510の歌を含む書状の中で、「梧桐日本琴一面対馬籍石山高枝」との用例がある。

勅撰集以外では、中古私家集・私撰集・歌合・定数歌等を調べてみたところ、わずかに二例を捜し得た。一つは、『大式高遠集』に長恨歌を題に詠んだ歌があり、詞書(長恨歌の一句)から歌中の「木の葉」が桐のことであろうと想像されるもの、

秋露梧桐葉落時

木の葉ちる時につけてぞなかくに我身の秋はまづしられける  
 である。もう一例は、『大納言経信集』の長歌（新拾遺<sup>181</sup>）に入集す  
 る）で、

あらたまの 年くれゆきて……きりのいとも たづさはる  
 身にしむことは……

と、琴の意味で用いられた「桐のいと」である。従って、千載集ま  
 での中古和歌では、「桐」或は「桐の葉」が詠歌の対象となった形  
 跡は見当らず、「桐」という言葉の使用も『経信集』の一例を数え  
 るのみとなっている。

このような「桐」が和歌素材として歌に詠み込まれ、認識される  
 ようになるのは、（表1）の如く、勅撰集では新古今集以後で、新  
 勅撰集・玉葉集・続千載集へと用例を拾ってゆくことが出来る。こ  
 のうち、風雅集に七首もの「桐」の歌が入集していることは注目に  
 値する事実であるが、今はそれが京極派歌人達が好んで詠んだもの  
 らしいということ指摘するに留めておきたい。

さて、このような勅撰集に於ける「桐」の用例は、中世の私家集  
 の類を検索して行くことによって、更に以下の用例を加えることが  
 出来る。（『私家集大成』の索引等によって検索したものである。）  
 尚、新古今前後については別に掲げる。

- 伏見院御集……………1 亀山殿七百首（後宇多院）……………1 為
- 尹千首……………1 東常縁集……………1 十輪和歌（心敬）……………1
- 松下集（正広）……………2 碧玉集（政為）……………1 再昌草・
- 雪玉集（美隆）……………3 柏玉和歌集（後柏原院）……………1
- 遠忠……………1 年代和歌抄（国永）……………1 三光院詠（実
- 枝）……………2 通勝集……………2

このうち、『亀山殿七百首』の後宇多院詠や、『為尹千首』の詠  
 は、「寄桐恋」という歌題で詠まれたものである。つまり、この頃  
 になると、「桐」は和歌素材として、ごく普通に扱われており、同  
 時に中世連歌にも詠まれ、下つては俳諧にもそれを認めて行くこと  
 が出来るようである。

ところで、勅撰集で「桐」を詠んだ歌では、先述の如く式子内親  
 王の歌が最初のもののだが、彼女がこの歌を詠んだ正治二年前後  
 を詳細に調べてみると、次の如く用例を拾うことが出来る。

建久二（二九〇）年 十題百首 定家

夕まぐれ風ふきすさぶ桐の葉にそよ今さらの秋にはあらねど

建久七（二九〇）年（拾遺愚草員外雜歌） 定家

桐の葉のうらふく風の夕まぐれそらや身にしむ秋は来にけり

建久八（二九〇）年まで（玉吟集 百首<sup>182</sup>） 家隆

古里の庭の日影もさえくれて桐の落葉に敷ふるなり

（新勅撰<sup>183</sup>）

▼正治二（三〇〇）年 正治百首 式子内親王

桐の葉も踏みわけ難くなりけり必ず人を待つとなけれど

” 家隆

古郷の桐のこずえをながめてもすむらん鳥を思ひこそやれ

” 寂蓮

百敷やれのこずえにすむ鳥の千とせは竹の色もかはらず

” 信広

日はくもる桐の葉がくれ秋やときさよ風涼しねやの手枕

建仁三（三〇三）年 千五百番歌合判詞 後鳥羽院

人はこで年ふる秋の柴の庵に桐の落葉を物ぞ訪ける

楓の戸は月にまかせて夜や明す桐の葉伝ひ風は吹つゝ、  
建保二(三三四年) 秋十五首歌合 雅経

風すさむ桐の落葉にあとたえてまど深き夜の秋の村雨

承久三(三三二年)―延応元(三三五年) 遠嶋百首 後鳥羽院

おなじくは桐の落葉もふりしけな私ふ人なき秋のまがきに

右によって式子内親王の歌以前の建久年間に、定家と家隆の歌三首が存在することがわかる。更に「桐」という素材が、定家・家隆・式子内親王・寂蓮・後鳥羽院・雅経などいわゆる新古今歌人達によって、この時期に詠み込まれ始めた点が注目される。

### 三

前節で掲げた「桐」という言葉を含んだ歌は、内容的に三つに分類出来る。一つは、琴(或は楽器)の意味で詠まれたもので、先掲『大納言経信集』(新拾遺(1881))の「きりのいとにも たずさはる…」や、『通勝集』の、

おのが名のいつきりそめて瑤琴のしらべえならずつくり出けんがそれである。これは周知の如く、琴や琵琶などを桐材でつくることによるものであるが、『後漢書』蔡邕伝に見える「焦尾琴」の故事、

呉人有燒桐以爨者、邕聞火烈之聲、知其良木、因請而裁為琴、果有美音、而其尾猶焦、故時人曰焦尾琴焉。

なども知られていたものと考えられる。

第二は、『正治百首』の家隆の歌、「古郷の桐のこずゑをながめてもすむらん鳥を思ひこそやれ」や、同じく寂蓮の歌「百敷や桐のこずゑにすむ鳥の千とせは竹の色もかはらず」などの如く、鳳凰の

棲む木として桐を詠んだものである。鳳凰が桐の木に棲むということは、『莊子』秋水篇に、

南方有鳥、其名爲鸞鶴、子知之乎、夫鸞鶴、発於南海而飛於海、非梧桐不止、非練実不食、非醴泉不飲、於是翺得腐鼠、鸞鶴過之、仰而視之曰嚇、今子欲以子之梁國而嚇我邪、

とあり、『經典釋文』に「鸞鶴、鳳凰之属也」と見える。また、『毛詩』卷阿に、

鳳凰矣于彼高岡、梧桐生矣于彼朝陽

とあり、『鄭箋』に「鳳凰之性非梧桐不棲、非竹実不食」の注があるので知られる。『枕草子』の「木の花は」で知られる一段(尚、後述)には、「桐の木の花……、もろこしに、ことごとしき名つきたる鳥の、えりてこれにのみあるらん、いみじう心ことなり」(大系本三七段)とあって、『春曙抄』は、

格物論云、鳳瑞応鳥、太平之世則見、其形鶏頭蛇頸鰓背魚尾、五彩色、高六尺許、非梧桐不栖非竹実不食云々。

と注している。しかし『春曙抄』の引く「格物論」なる書物の素性は不明である。清少納言が何を典拠としたかにわかには決めかねるが、「格物論」を比定するのは適當でない(「格物論」の記述は、前記、『毛詩』の『鄭箋』に拠ったものか)。

第三の類が、式子内親王の歌を初めとする桐の葉そのものを詠んだものである。の中には、前掲の『大式高遠集』の「木の葉ちる時につけてぞなかくに我身の秋はまづしられる」や、伏見院の、

山風にもろき一葉はかつおちて梢秋なるひぐらしの声(玉葉480)の如く、「桐」という言葉は直接使われていないものも含まれる。

高遠の歌は長恨歌の一句に拠るものであり、伏見院の歌は、『淮南子』説山訓の「見一葉落、而知歲之將暮」や、『白氏六帖』の「一葉落知天下秋」に拠って詠まれたものであろう。しかし、『淮南子』も『白氏六帖』も、「一葉」が「桐」の葉であるとは限定していない。桐の葉と結びついた例としては、新聞一美氏（つとむ）によると、『群芳譜』の、

立秋之日、如某時立秋、至期一葉先墜、故云、梧桐一葉落、天下尽知秋、

があるという。が、それ以前では例を知らない。博雅の御示教を仰ぎたい。この他第三の類の多くは、「桐の葉落ちて」「桐の落葉」「桐の枯葉」という表現で用いられたものである。

以上、三分類のうち、数量的には第三の類に入る歌が最も多い。収集した和歌用例四十六例のうち、第一類に入るものはわずかに二例、第二類は六例で、残り四十例が第三類である。しかし、先述の如く、新古今期以前に、この第三類の桐の葉を詠んだ歌は、『高遠集』の一首のみで、しかも直接「桐の葉」という言葉を使った歌は見当たらないのである。一体なぜ、中古和歌に於ては「桐の葉」が詠まれていないのであろうか。

周知の如く、『源氏物語』第一の巻は「桐壺」であるが、これは中庭に桐の木が植えてあることから、宮中五舎の一つ淑景舎のことを桐壺と称したものである。『禁秘抄考註』には、

桐壺 東二淑景舎也 南北舎各五間四面桐近年不見 但荒廢之間每度有桐

とある。『源氏物語提要』にも、

桐壺 此巻を桐壺といふは詞をとりて名とす。……壺とは大内

の御坪の五舎のその一つなり。此つほには桐を植させけるによりて桐壺とは申なり。……

と注している。従つて、桐という植物が存在し、宮中の中庭に植えられていたことは確かである。『正治百首』の寂蓮の歌にも、「百敷や桐のこずゑにすむ鳥の……」とあった。桐の木自体が下賤なものにとらえられていたとは考えられない。しかし、この『源氏物語』にも「桐」という言葉自体は、地の文にも和歌にも一例も使われていない。

それをはっきりと使用しているのは、『枕草子』で、

木の花は……桐の木の花むらさきに咲きたるはなほをかききに、葉のひろごりざまぞ、うたてこちたけれど、こと木どもとひとしういふべきにもあらず。もろこしに、ことごとしき名つきたる鳥の、えりてこれにのみあるらん、いみじう心ことなり。まいて琴につくりてさまざまなる音のいでくるなどは、をかしなど世のつねにいふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。

(日本古典文学大系本三七段)

清少納言の「桐」をめぐる評価は、「紫」に咲く花が「をかし」である点、「ことごとしき名つきたる鳥(鳳凰)」がすむ点、そして琴につくられてさまざまな音が出てくる点で、「いみじうめでたけれ」となっている。ただ一つ清少納言がマイナスに評価したのは、「葉のひろごりざま」で、「うたてこちたけれど」と躊躇いがちに述べている。実際、桐の葉というのは、紅葉(もみぢ)などとは比べものにならない位大きくて、清少納言が「うたてこちたけれど」と言った気持は今日の我々にも十分に理解できるものである。

『枕草子』の記述を以って決論づけるわけにはゆかないが、恐らくは、「桐の葉」というものは王朝和文の世界で未だ美意識の範疇外に存在し、あえてそれに着目すれば「葉のひろごりざまうたてこちた」というのが評価の有様だったと想像することが出来る。

#### 四

ここで少々本筋からそれることになるが、植物学的な素材の性質を明らかにしておくことも、また必要なことであろう。その場合、「桐」と「梧桐」との違いが問題となる。周知の如く、「梧桐」は「青桐」の漢名であるが、では、「青桐」と「桐」の違いはどのようなものであろうか。

『廿卷本和名類聚抄』は「梧桐」について次のように記している。

陶隱居本草注云、桐有四種、青桐<sup>青</sup>、梧桐<sup>上青</sup>、崗桐、栲桐

松竹梅類、梧桐者色白有子者<sup>葉俗呼爲青</sup>、崗桐土、栲桐土、栲桐者白桐也、三月花紫、

亦堪作琴瑟者是也、

「陶隱居本草注」を引いて、桐には、青桐・梧桐・崗桐・栲桐の四種があるという。青桐と梧桐を別物とする点は不明だが、大よそは次の『大和本草』の記述に拠るのが適当であろう。まず、「梧桐」について、

其皮青シ、故又青桐ト云、古人詩歌ニ詠ゼシハコレナリ、佳木ナリ、園庭ニ多ク植ベシ、世ニ白桐ハ多ク、梧桐ハ稀ナリ、夏花サキ、秋ミノル、実ノ穀ワレテ開ク、実ハ穀ニ付テ不落……と記し、「白桐」については、

此木切レバ早く長ズ、故ニキリト云、桐ノ類多シ、梧桐ハ青キ

リ也、白桐ハツ子ノ桐ナリ、世ニ白桐ヲ多ク用テ器トス、良材ナリ、花淡紫アリ、白キアリ、実ハ桃ニ似テ内ニ薄片多シ、是ヲウフレバ生ズ、……

と記している。つまり、「桐」と言った時、梧桐（青桐）と白桐（ツ子ノ桐）とがあることに留意せねばならない。梧桐は青桐の漢名であり、白桐は桐の異名ということである。

右を『牧野新日本植物図鑑』<sup>8)</sup>によって調べてみると、桐はゴマノハグサ科の植物、青桐はアオギリ科の植物で、きりとは言い条、別種のものであることがわかる。両者の顕著な違いは花に於て見られる。桐は、「初夏、枝の頂きに円すい形の大形の花序をつけ、多数の紫色の花を開く」（同書）のに対し、青桐は「盛夏に枝先に大きな円すい花序を作って多数の黄色い小さな花が咲き、一つの花序の中に雄花と雌花がまじる」（同書）。従って、五月頃紫色の筒状の大きな花を咲かせているのは、青桐ではなく、桐である。

それでは、桐壺に植えられていたのは桐であったのか梧桐であったのか、和歌に詠まれている桐はどちらか、という点に興味を湧いてくる。先の『大和本草』は、梧桐のことを「古人詩歌ニ詠ゼシハコレナリ、佳木ナリ、園庭ニ多ク植ベシ」と記している。確かに庭に植えて鑑賞に耐えるのは梧桐の方であろうが両者の識別に花の形状の違いは手がかりにならないだろうか。

ところが、『源氏物語』には、桐壺という巻はあるものの、桐という言葉自体が地の文にも和歌にも用いられていないので、もとより花の記述はない。そして、和歌用例でも、三節で分類した如く、葉を詠んだものはあっても花の形や色を詠んだものは無いのである。『枕草子』のみが「桐の木の花むらさきに咲きたるは」と、花

について記している。これを見ると、清少納言の言っているのは梧桐ではなく、桐についてであるように思われる。しかし、「ことごとしき名つきたる鳥」である鳳凰の棲むのは梧桐であるから、清少納言が植物学的に矛盾した記述をしているのではないかという気がする。事実、右に闕して、「枕草子に桐と云うているのは梧桐ではないらしいが、梧桐も桐の一種としてしまったものと思われる」という解釈をする人もある。『牧野新日本植物図鑑』でも、「桐に鳳凰という組合せが昔からいわれているが、このホウオウのとまったのはじつはこの木（おおぎり、筆者注）であって、紫の花のざくキリではない」とわざわざ注している。果して清少納言が勘違いをしているのであろうか。

そもその鳳凰の故事の源から考えてみる必要がありそうである。『枕草子』の先の記述が、元稹と白楽天の唱和詩に関連しているとの指摘は既に存在するところだが、この元白の両詩に於ても、紫の花の咲く桐の木に鳳凰がとり合わされているのである。

麗月上山館

紫桐垂好陰

可惜暗澹色

無人知此心

舜没蒼梧野

鳳杼丹穴岑

遺落在人世

光華那復深

(以下略)

(『元氏長慶集』 「桐花」)

山木多蒼鬱

茲桐独秀々

葉重碧雲片

花簇紫霞英

是時三月天

春暖山雨晴

……(中略)

況此好顔色

花紫葉青々

……(中略)……

為君長高枝

鳳凰上頭鳴

(以下略)

(『白氏長慶集』 「答桐花」)

他にも中国の用例を検してみると、桐という言葉と梧桐という言葉とは同義として用いられているようである。すなわち、『呂氏春秋』季春の高誘注に、

桐始華

桐始華 桐始華 桐始華

とあり、『山海經』北山經の郭璞注にも、

又北三百八十里曰隩山其上多漆其下多桐楸

桐楸 桐楸 桐楸

とある。また、『礼記』雜記上に、『經典釋文』によると、

杵反以梧桐音桐

とあり、桐と梧桐とは共通して使われている。

従って、紫の花の咲く桐に鳳凰が止まっても何らさしつかえないことと考えた方が良いでしょう。『枕草子』の記述も、また、『源氏物語』桐壺の巻から紫のイメージと鳳凰の高貴なイメージとの両方を連想することも不自然なことではない。もとより和歌に詠まれた桐が梧桐であったのかどうかということはわからないが、前掲『和名類聚抄』の「和名皆木里」に従う他はない。

## 五

本節では桐の葉を詠んだ歌の様相を分析してみたい。まず、収集した四十六首について、部立別に見ると、四季の歌として詠まれたものが四十二首あり、残り四首は恋の歌である(四季の歌の中に、式子内親王の一首の如く、古来恋の情をよみとるべきか否かが

問題となるような歌もあるが、はっきりと恋題で詠まれたもののみを教えた。

恋の歌では、

秋の恋の心を

秋の雨に桐の葉おつる夕暮を思ひすつるぞまつにまされる

(新拾遺恋 1105 後九条前内大臣)

寄桐恋

契りしもたがはざらまし桐の葉をきざみし人のある世なりせば

(龜山殿七百首 後宇多院)

寄桐恋

あぢきなや桐の一葉の落ち初めて人の秋こそやが見えけれ

(為尹卿千首和歌)

寄木恋

桐の葉もおつる涙の教そへて人の心の秋ぞしらるゝ

(三光院詠 実永)

後宇多院詠「桐の葉をきざみし人の……」は、『史記』晋世家の「削桐葉為珪」の故事をふまえている。また、為尹詠「桐の一葉の落ち初めて」は、『淮南子』説山訓の一節(前述)などに拠ったものである。この歌と次の実永の詠は、桐の葉が落ちる秋が到来したと、人の心にも「秋(鮑き)」が来たことの両意をかけて詠まれている。

四季の歌では秋の歌が最も多く、他の季節のものが若干ある。それらは次のような歌である。

ふるさとの庭の日かげもさえくれて桐の落葉にあられふるなり

(新勅撰冬 393 家隆)

閑居冬夕を

さびしさよ桐の落葉は風になりて人はおとせぬやどの夕暮

(風雅雜 1592 從二位為子)

静対花

桐の葉の砌にもろき秋はあれどゆふべの苔に花おつるとき

(心敬十跡和歌)

五月中の頃、おなし庭にきりの木のありけるが、一葉お

ちければ、

桐の葉も心よはくや成ぬらんかならず秋をまたでおつれば

(年代和歌抄 国永)

家隆と從二位為子の二首は冬の歌である。前者家隆の歌は、後述する定家の二首と共に式子内親王の歌に先行するものだが、式子の歌同様散ってしまった「落葉」を詠んでいる。その上、「桐の落葉」に「あられ」のとり合わせは、乾いた桐の落葉に白い霰の玉を視覚に訴えるのみならず、その音までも想像させて、寒々とした冬の情景を描いている。また後者も、冬の閑居の夕べを桐の落葉に吹く風の音でとらえている。「人はおとせぬ」の表現は、式子内親王の「桐の葉も」の歌の影響下に詠まれたのであろうことを窺わせる。

国永の歌は、詞書で知られる如く、秋に落ちるべき葉が五月中の頃(夏)に落ちたことを詠んだ機知の歌である。一方、心敬の歌は注目される一首である。なぜならば、私の捜し得た所だた一首、この歌のみが桐の花を詠んでいるからである。歌中には花の形状は詠まれているが、下句「花おつるとき」は春か夏であろう。清少納言は桐の花を評価したが、和歌にその花を詠んだものが、はるかに時を隔てた右の一首まで無い点は興味深い。

秋の歌は様々に詠まれているが、季節の推移によって更に分類してみると、一つは落葉ではなく桐の木についている葉を詠んだものがあり、初秋の頃の歌である。

夕まぐれ風ふきすさぶ桐の葉にそよ今さらの秋にはあらねど

(十題百首 定家)

桐の葉のうらふく風の夕まぐれそらや身にしむ秋は来にけり

(拾遺愚草員外雜歌)

日はくもる桐の葉がくれ秋やときさよ風涼しねやの手枕

(正治百首 信広)

櫛の戸は月に任せて夜や明す桐の葉伝ひ風は吹つゝ

(千五百番歌合 御判)

桐の葉に秋風立ちて道芝のつゆもおもひもふかきころかな

(東常縁集)

これらはいずれも桐の木の枝葉に秋風が吹く様を詠んでいる点で共通している。定家の歌二首は、式子内親王の歌に先立つ時期に詠まれたものであるが、やはり漢詩句の影響下に成った作ではないかと思われる。『和漢朗詠集』秋(早秋)所収の白楽天の詩句に、

槐花雨潤新秋地 桐葉風涼欲夜天

がある。「槐(えんじゅ)の花が地に落ちたのを初秋の雨がしめやかに潤している。桐の葉を吹く風もひんやりとして空はまさに日暮を遅えようとしている。」(新潮日本古典集成『和漢朗詠集』頭注)との意である。定家の歌の「夕まぐれ」「風ふきすさぶ」「桐の葉」「うらふく風」という表現や設定は白楽天の詩句に非常に近似している。更に新秋の清涼感までもよく映していることがわかる。

尚、風と桐の木の葉の関係については次の如き『和漢朗詠集』の

注が参考になろう。

○桐葉ハキリノ葉也 秋ノ風ハ必スタニ米ル 桐ノ木ノ葉ハ殊ニ

余ヨリモ風ソヨメク

(圓雄筆和漢朗詠集注)

○下ハキリノハ殊ニ風ノハヤクウツテソヨメケハス、シト也

(広大本仮名注)

秋の歌の第二も、やはり初秋の歌であるが、桐の葉が一枚落ちることによって秋の到来を知るといふものである。

山風にもろき一葉はかつおちて梢秋なるひぐらしの声

(玉葉秋上集 伏見院)

おちそむる桐の一葉の声のうちに秋のあはれをききはじめぬる

(風雅秋上集 入道二品親王法守)

秋きぬと今朝ぞしら露風のまに外面の桐も一葉ちる陰

(松下集)

桐が枝にまだ朝霧はたゝねども秋をしらせて一葉おつ也

(遠忠)

これらが、『淮南子』説山訓の「見一葉落、而知歲之符暮」や『白氏六帖』の「一葉落知天下秋」に拠って詠まれたものであることは既に述べたところである。

桐の葉が秋になると、まず最初に落ちるといふことは、『遠嶋百首』の「おなじくは桐の落葉もふりしけな私ふ人なき秋のまがきに」の注に、

きりの落葉もと云事は諸木の初にきりの葉落初て、よの木の葉ふり敷と御なげきの御心なり(高岡図書館蔵本遠嶋百首)

桐は諸木より先おつる物也(神宮文庫本遠嶋百首)

などとあることによっても理解される。前掲歌の二首目法守法親王

の歌は、古今集秋下31貫之の「夕月夜をぐらの山になく鹿の声の中  
にや秋はくるらむ」に抛りつつも、新たに「落ちそむる桐の一葉の  
声のうち」と詠んだものである。

秋の歌の第三は、仲秋から晩秋にかけての「落ちる葉」或は「落  
ちた葉」を詠んだもので、量的にも多い。式子内親王の一首は、「落  
ちる」という直接的表現はないが、「踏みわけ難くなり」にけり」  
で、桐の落葉と知られる。『千五百番歌合』後鳥羽院の判歌、

人はこで年ふる秋の柴の庵に桐の落葉を物ぞ訪ける（六三三番）

『遠嶋百首』中の一首、

おなじくは桐の落葉もふりしけな払ふ人なき秋のまがきにも  
雲田氣的には、式子内親王の歌に似通っており、式子内親王歌か  
らの影響作と考えられる（統群書類従本遠嶋百首注には「式子内親  
王の桐の葉の哥をふまへて……」とあり、賀茂別雷社泉亭文庫本に  
は「此哥は式子内親王桐の葉もと同前也」とある）。

この他、第三の歌の多くは、風・雨・嵐という自然現象と共に詠  
まれている。例えば、

庭をだにしばしと思ふわが宿の桐のおち葉に秋風ぞ吹く

（統後拾遺41 実氏）

一しきり嵐はすぎて桐の葉のしづかにおつる夕ぐれの庭

（風雅645 昭訓門院権大納言）

桐の葉にかゝるをとよりきゝそめぬくれぬる庭の秋の村雨

（伏見院御集）

等である。「桐の葉」という素材は、風や雨と取り合わされること  
によって、より効果的な和歌素材の一つとなっているようである。  
中でも、雨と共に詠まれたものには、他に、

風すさぶ桐の落葉に跡絶えて窓深き夜の秋の村雨

（明日香井集）

夕暮の庭すさまじき秋風に桐の葉落ちて村雨ぞ降る

（玉葉76 永福門院）

秋の雨にしをれておつる桐の葉は音するしもぞさびしかりける

（風雅710 西園寺前内大臣女）

などがあり、秋の寂寥とした情景を巧みに表現している。

## 六

上述の如く、「桐の葉」という素材は中世和歌に於て様々に詠ま  
れている。中古和歌では詠まれることのなかった、この「桐の葉」  
が新古今期になって歌に詠み込まれるようになること、一言で言え  
ば詠歌素材の拡大ということだが、その素材が拡大されて行く背景  
には何があったのかを考えて本稿を結びたい。

新古今期の和歌が本歌取りのみならず、広く物語・漢詩文に拠る  
ことによって新風和歌の世界を切り拓いて行ったことは周知のとこ  
ろである。就中、漢詩文については、定家の『詠歌大概』に「白氏  
文集第一第二の帙、常に握翫すべし、深く和歌の心に通ず」とある  
ことなどから、『白氏文集』が珍重されたことが窺える。「桐の葉」  
も本来は漢詩文の素材であったものが、『白氏文集』などの詩句に  
よって和歌世界へ新たに導かれたと考えられる。

建久年間に詠まれた定家の二首「夕まぐれ風ふきすさぶ桐の葉に  
そよ今さらの秋にはあらねど」「桐の葉のうらふく風の夕まぐれそ  
らや身にしむ秋は来にけり」が、「槐花雨潤新秋地、桐葉風涼欲夜  
天」（『白氏文集』・『和漢朗詠集』所収）に拠り、正治二年の式  
内親王の一首が、「秋庭不掃携藤杖、閑踏梧桐黄葉行」（同前）に

抱っていることは先述のとおりである。建久八年までの作と見られる家隆の一首「古里の庭の日影もさえくれて桐の落葉に敲ふるなり」については典拠となる詩句を捜し得ていないが、定家の歌が、「桐の葉」と「風」を詠み込んだ初めであり、家隆と式子内親王の歌が、落ちた「桐の葉」を詠んだ初めである。

その他、「桐の葉」に「雨」（秋の雨・秋の村雨など）をとり合わせて詠んだ歌の多いことは、前節五でふれた通りであるが、このとり合わせも、「長恨歌」の詩句、

春風桃李花開日 秋雨梧桐葉落時

からの発想ではないかと思われる。但し、「秋雨」のところを、『和漢朗詠集』では「秋露」としており問題を残す。

『和漢朗詠集』の諸本で「秋雨」に作るものは見つけていない。

「長恨歌」では、管見抄・要文抄及び宋本・那波本以下の版本は

「雨」に作り、我が国の旧鈔本の正安本・三条西家旧蔵本・文和本・斯道文庫本・陽明墨跡本では「露」に作る。この異同は、古く唐代に分化したものであるという。

漢詩句に拠るといふ方法で和歌に詠み込まれた「桐の葉」が、新古今以後も盛んに歌われて行ったのは、式子内親王の一首が新古今集に入れられたことなども要因の一つであろうが、もう一つには素材の持つ聴覚的要素があったのではなからうか。すなわち、「ひろ

がりさま」の「うたてこちた」き「桐の葉」が秋風に吹かれたり、落葉したり、或は落葉した上に秋の村雨が降ったりする景は、伝統的素材である紅葉の落葉にはない「音」を伴っている。この大きな葉の持っている音、必ずしもそれは大きな音とは限らない、が中世和歌の嗜好と合致したのではなからうか。例えば、

おちそむる桐の一片の声のうちに秋のあはれをききはじめぬる

(風雅 150 入道二品親王法守)

秋の雨にしをれておつる桐の葉は音するしもそびしかりける

(風雅 710 西園寺前内大臣女)

桐の葉にかゝる音よりきゝそめぬくれぬる庭の秋の村雨

(伏見院御集)

ぬれておつる桐の枯葉は音おもみ風はかろき秋の村雨

(風雅 646 光嚴院)

秋はまた昨日今日かの桐の葉のつれなき色に雨おつることゑ

(雪玉集)

などの歌は、桐の葉の「音」をとらえて巧みである。

右の例の如く「音」「こゑ」という語は直接使われていないが、やはり「音」を意識して詠んだと思われる歌もある。

桐の葉のかさなる上に雨おちて夕さびしき秋のくれ哉

(通勝集)

は、読者に対して桐の落葉のかさなった上に雨が降る音を必然的に想像させる。桐の葉は茶色になって枯れるまで枝についていて、やっと落ちてくる。乾いた落葉が重なった上に雨が落ちてくる、その音が秋の夕のさびしさを感じさせるというのである。また、

さびしさよ桐の落葉は風になりて人は音せぬやどの夕暮

(風雅 1159 従二位為子)

などは、「桐の落葉は風になりて」で、乾いた桐の落葉がカサコソと音をたてている様がおのづと想い描かれ、下句では対照的に、風が桐の落葉を訪れるばかりで肝心の人は訪れぬ宿の夕暮のさびじさが感じられる歌である。この歌は式子内親王の歌をふまえて詠まれ

たものと思われるが、式子内親王の一首でさえも、上句「踏みわけ難くなりけり」で、既に読者は脳裡で、つもつた桐の落葉を踏みわけける音を想像するのではなからうか。しかし、それは実際はありえぬ幻の音なのであるが。

定家の二首「夕まぐれ」「桐の葉の」の、大きな葉が木の枝で風に吹かれているさまは、やはり音を想わせるし、家隆の「ふるさとの」も既述の如く、桐の落葉に露が落ちてくる音があった。このような歌の理解は、或は深読みしに陥いるかもしれないが、歌の背後にある音を無視することは出来ない。「桐の葉」という素材にそのような「音」の要素がなかったら、それほど魅力的な素材とはなりえなかったのではなからうか。

漢詩文の世界では、「桐の葉」は秋の素材としてのみならず、夏に緑の葉が青々としているさまや、それが涼しい木陰をつくるという発想でも用いられている。しかし、中世和歌では専ら秋の素材として取り込まれたのは、そのような詩文が我国に将来されても、『和漢朗詠集』の如きものに入れられて広く用いられることがなかったという事情もあろうが、上述の如き聴覚的要素への嗜好も反映しているのかもしれない。

かくして、「桐の葉」は中世和歌の秋の素材に新しいページを開いたわけだが、同様のことは、「夕立」について、稲田利徳氏が、中世和歌に於ける歌材の拡大ということを立証されている。

「桐の葉」を詠んだ一首の成功作は新しい美の発見であり、それにつづく多くの「桐の葉」の歌は新しい中世の美意識の誕生を意味しているのではなからうか。

(昭和59年4月稿)

〔注〕

(1) 「式子内親王の原理」(『学苑』30号、昭和40年1月、

『新古今世界と中世文学』(上)昭和47年、北沢図書出版)

(2) 白氏文集卷十三所収の「晚秋閑居」と題する詩で、起句と承句は、

地僻門深少送迎、披衣閑坐養幽情  
である。

(3) 有斐閣新書『新古今和歌集入門』上條彰次・片山亨・佐藤恒雄著、(昭和53年)。『研究資料日本古典文学』⑥和歌(昭和58年、明治書院)の中でも(二四五頁)、佐藤氏が同様のことを述べておられる。

(4) 中古和歌で「長恨歌」を題に詠んだものとしては、他に『伊勢集』『二条太皇太后宮大式集』に例が見られるが、「桐の葉」を直接的に示すような例はない。

(5) 「初心百首」の成立時期については、久保田淳『藤原家隆集とその研究』(昭和43年、三弥井書店)四七〇頁―四七三頁による。

(6) 「格物論」は、室町時代の書写になる慶応大学本「李鶴百詠注」にも見えるが、これについて池田利夫氏は、「格物論とは何の書を指すか詳かにできないけれども、この書は慶応本の上欄書き込みの注にも散見されるので、この書写年次の頃にも用いられた書であつたらうか。格物を付した書は宋末に見かけるので、格物叢話などととも、これも唐代の張翊芳の著じた注の中では年代上不都合な書名と言えるかもしれない」(『日中比較文学の基礎研究』註説読語二八五頁、昭和49年、笠間書院)

と述べられている。

(7) 「桐と長恨歌と桐壺巻——漢文学より見た源氏物語の誕生——」(『甲南大学紀要』文学編48、昭和57年)

(8) 『牧野新日本植物図鑑』(昭和36年、北隆館)

(9) 清水泰「桐壺の巻の名」(『平安文学研究』第22輯 昭和33年)

(10) 注(7)の新聞氏論文による。

(11) 信広のこの歌も、定家の歌同様に『和漢朗詠集』の同詩句をふまえたものと思われるが、作者信広については問題があるので今ふれない。

(12) 定家の『白氏文集』受容については佐藤恒雄「定家・慈円の白氏文集受容——第一第二帙の問題と採句傾向の分析から——」(『中世文学』第18号、昭和48年)に詳しい。

(13) 太田次男「長恨歌伝・長恨歌の本文について——旧鈔本を中心として」(『斯道文庫論集』第18輯 昭和56年)

(14) 稲田利徳「夕立の歌——中世和歌における歌材の拡大——」(『国語国文』第51巻第6号 昭和57年)

〔付記〕本稿は、昭和58年度広島大学国語国文学会春季研究会に於て口頭発表したものをまとめたものである。発表の席上御教示を賜わった位藤邦生先生、また終始御指導戴いた稲賀敬二先生に感謝申し上げます。